

# 読みを「開く」授業

——山月記の場合——

高橋 哲郎

## I はじめに — 問題の所在 —

山月記の指導について記すにあたり、まず文学、および「読み」に関する基本的な立場を記し、本実践のねらいを明確にしておきたい。はじめに現在の文学教材＝作品に対する認識は「テキスト」論の流れを受けて、作品とは読者の読みによって立ち上がるシステムであり、作品そのものというようなものはどこにも存在しないし、またそれは時間軸上においても常に変容するものとしてとらえられている。またこれを受けて「読む」という行為に対する認識も「読者論」や「受容理論」の展開の流れを受けて、そこには一義的な解釈、伝達されたものを読み取るという正解到達主義的な考えから、多義的な鑑賞、さらには読者側からの創造、生産的なパラダイムへの移行といった傾向が見受けられる。

ところで現在は、日々目まぐるしく変化する国際化社会や情報化社会であり、何をもって是非を判断するか、あるいは自己とは何か、自己を取り巻く他者、そして世界とは何かということがわかりにくく、最終的には主体自らが具体的な状況下で常にどのよう

に判断するかという力が求められる。したがって、文学における授業も今までのような研究者や教師が生み出してきた読みを正しい読みとして伝達、理解させるのではなく、自らの読みを他の読みとの関係の中で一つの読みの可能性として相対的に位置づけ、そして、自己の読みと他の読みとの関係の中で、それぞれがなぜそう読んだかを意識化していくことで、そこに自己の枠組みに対する内省と変化を起し、常に新しい変化を促す生産的、動的な場としての「読み」を通して、自己世界を認識し、同時に自己の周囲の世界との網の目をより柔軟に変容させることをねらいとすることが必要となる。

ところで、実際の学習の場においてこのような読者の側にたった自由な読みを認めようとする時に直面する問題は、教室という場で文学教材を使っていった何を教えるかという問題である。というのも先に述べた立場に立てば、作品の「主題」や「感動」といったものは当然教えることができなものであり、指導内容の普遍性、一貫性をそこに見出すことは難しい。また、自由な読みとはある意味では恣意的な読みであり、結果として教師の理想とする読みとはかけ離れたものになってしまうことも考えられるのである。そこで、本稿においてはこのように読みのアナキー

状態に陥らないために、まずそれぞれの「読み」を客観化させ、さらに「戦略的な」読みを経験させるといふ指導過程を取ることによつて読みを意識化することにより、そこに開かれた読みの可能性を自覚させ、さらに「自己認識の変革」にまで至りたいと考へるものである。

本稿で目指す授業における、具体的な指導のねらいと指導過程は以下の通りである。

- (1) 読みの多様性、可変性についての意識化をはかる。
- (2) 読みを意識化し、さらに変革、創造するというストラテジーの獲得をはかり、主体的に小説を読む力をつける。
- (3) 読みを通して、それぞれの思考、認識、枠組みを意識化させ、かつ他を受け入れる認識を育てる。

1次 自らのテキストを作る。

(自らのコード コンテキストの使用)

2次 読みを交流し、差異を明確にする。

(自らのコード 枠組みの自覚化)

3次 戦略的読みを経験する。

(コード コンテキストの意図的变化)

4次 読みの内省をはかる。

(自らのコードの相対化、枠組みの変化)

## II 教材としての山月記

山月記は作品としてはおもしろいが、授業をするときにはやりにくい面がある。その原因としては(1)文体や表現が難解である、(2)李徴の告白を袁參を通して聞くという、一人称告白体小説が作品の中で屈折しているために共感しにくい点、(3)テーマが多様であり、絞り切れないことなどがあげられる。また、授業のねらい、および方法に関しても従来の読解指導が変化していない現実がある。これは結局授業時間数が少ないことと評価の在り方が依然従来通りであることが問題であろう。したがって教師は共感的理解やテーマに即した授業を展開したくてもできないという現実があるようだ。

以上のことを踏まえると、山月記の教材特性を生かす授業としては特に以下のようなものが考えられる。

A 李徴の告白を袁參が聞くという語りの構造を踏まえる。

(1) 対象人物である李徴に同化できるかどうか。

(同化と異化の世界の相違)

(2) 李徴が語ったもの、語らなかつたものは何か。またそれをどうとらえるか。

(一人称告白小説としての読み 不条理の世界)

(3) 妻子から見た李徴の世界や袁參から見た李徴の世界は李徴が見た世界とのずれはないか。

(自己としての悲劇と周囲からみた悲劇の相違)

B 多様なテーマ、価値観を含むということを踏まえる。

(1) 芸術至上主義というテーマについて

(2) 個人と社会の関係について

(3) 袁参との友情について 真の友情とは何か

(4) 家族との愛について

C 変身譚としての作品の設定や作者の人生を踏まえる。

(1) 虎になるということの意味とその設定効果について

(2) 現代の状況と同じもの、違うものの比較について

(3) 人虎伝との比較

(4) 作者の伝記を読んでの比較、考察

これらのものを前提にして授業内容について考えると、A系列を生かして李徴に対する同化、異化を中心にコードを変えて読む授業や、B、あるいはC系列を使ってコンテキストを変えて読む授業、例えば芸術至上主義や個人と社会についてなどにたいし「絵仙師良秀」や「田舎教師」「塩狩峠」などをセット教材として、類比、対比的に読む授業などが考えられる。

### III 指導過程

読みを開く「山月記の指導」について、その指導過程を示す。

1次 初発の感想および自らの課題の設定

(疑問点、考えてみたいところの意識化)

2次 内容の読み取りと課題の探求

(初発における疑問点の解明⇨問題解決の読み)

3次 読み取り後の読みのまとめ

(読後の感想 自らの読みの意識化)

4次 戦略的な読みをくぐる

(他の読みとの交流と内省)

基本的には1次から3次までの指導は今までの課題解決型の読解の授業を踏まえ、ねらいとしては作品の内容、テーマについて学習者が自らが読み解くことを主眼としている。したがって特に2次の指導においては、課題解決型のグループ学習か、あるいは、一斉授業をしながら、そのテーマごとに止まって考え、自らの考えを表現させる方法を取っている。また、4次の指導が読みを開く授業の内容にあたる。戦略的な読みの方法としては今回は「テキスト外の要素によるコードの変換」⇨他の学習者の読みを使って作品を読み解き、内省するという方法を使ったが、今回の指導においてはそのねらいを読むこと自体の意識化というよりは山月記という作品世界を読むことに置いたために、方法論としては基本的に、また読みを変化させる戦略性としては弱いものとなった。しかし、先にも見てきたように、山月記の世界は多様なテーマや価値観をはらんでおり、また視点人物と対象人物にねじれがあるために同化と異化のシステムが混在しているので、この方法でも十分効果があると考えられる。以下に4次の指導過程をあげておく。

4次 戦略的な読みの指導過程

4次 戦略的な読み＝読みを開く			
1 自らの読 みを意識 化させる	2 読みを交 流させる	3 戦略的読 みを潜ら せる	4 自らの読 みを内省 させ、枠 組みの変 化、拡充 を促す
・プリント2の中のテーマについて、観点が取りかえられいくつかの課題を分り上げ、自らの読みの立場を明確にする。(プリント3 問1)	・プリント3、問1のそれぞれのテーマについて自らの考えとその理由を述べる。 ・それぞれの考えの違いを明確にし、それをももとなぜその違いが出てくるのかを討論する。	・プリント3の問1で、自らの読みとしてなかった意見についてそれを自分み直す。(他者のコード2) ・他者の読みが自らの中に獲得できたかどうか感想を記す。(プリント3 問3)	・他者の読みと今までの自分の読みを比較し、自らの読み考える特徴について内省する。 ・他者の読みはどのような発想から出てきているのかに思いを巡らす。(プリント3 問4)
・自らの読みの枠組みが明確になるように意識させる。	・討論においては、それぞれの意見を本文にてできるだけ戻って確認するよう指示する。	・他者のコードで読めるかどうかについて本文を読む時間を取る。 ・自らの読みを変化させることを無理に求めるのではなく素直な感想を記させる。	・問1で答えた解答と問3の解答を比較させ、自己の読みの変化および他との読みとの違い個別について内省させる。 ・自己の内面まで掘り下げられるように感想を記す時間を十分に取る。
個別	グループ	個別	個別

IV 授業の実際

これまでの理論、教材分析、指導過程をうけて、授業の実際について、ここでは特に本実践の中心である4次について報告する。

(1) 自らの読みを意識化させる

自らの読みを意識化させるために、ここまでの授業で出てきた生徒の意見を特に李徴の生き方にしぼって観点別に集約し、その意見に賛成するか反対するかを考えさせる。なお本稿では5名の生徒の班の様子を報告する。

問一 李徴の生き方に関する次の意見についてあなたはどのように思いますか。
1 自分の夢や目標に向かってすべてをそそぎ込む生き方は芸術家としてすばらしい。
2 人ととらわれない生き方としては哀参よりも幸せな生き方である。
3 虎になる過程で自分について内省し、成長できたので李徴の人生としてはよかった。
4 虎になることで、外見も内面も一致し、虎として悩む事なく生きて行けるのでよい。
5 周囲とうまくやろうとしてもできない性情から虎になる李徴に共感できる。
6 自らのさだめにより虎にならざるを得ない李徴はかわいそうだ。

- 7 自らの行動によって虎になったのは自業自得である。  
 8 もっと自分が傷つくことを恐れずに、他人との関わりの中で切磋琢磨すべきだ。  
 9 夢に生きるよりも家族のために生きるべきである。

生徒の解答

Aさん	○	○	×	◎	×	×	×	×
Bくん	○	◎	△	×	×	×	△	×
Cさん	△	○	○	△	×	○	◎	×
Dくん	×	×	○	×	×	◎	○	△
Eさん	○	△	△	×	×	◎	○	△

- ◎強く思う  
 ○そう思う  
 △どちらともいえない  
 ×そう思わない

(分析) ここまで見てきたように李徴への同化の程度が読み取りに大きな影響を与える。ここでは問5がそれにあたるが、共感が強いのはA、Bであり、それ以外は批判的である。この違いがそれ以外のすべての内容にも影響を与え、特にAとDは解答がすべて反対となっている。

(2) 読みを交流させるII 討論

自ら書いた問一の解答をもとに以下の手順で討論を行った。

- ① 自らの意見の提示 ② なぜそのように考えたかの理由提示  
 ③ 自由討議

司会を立て、できるだけそれぞれの観点がわかりやすくなるように、また発言が公平になるように気をつけた。また、発言に関

しては本文の内容をできるだけ踏まえることを前提とした。実際の討論では生徒同士で発言が相次ぎ、また自分達で問題を明確にしながら討論をしようという姿勢があり、活発な討議となった。ここでは、特に問の1、4、5、7、8について報告する。

- 1 自分の夢や目標に向かってすべてをそそぎ込む生き方は芸術家としてすばらしい。

A、B、Eは賛成、Dは反対、Cは保留。意見の表明では賛成派の意見は「芸術というものは何かを犠牲にしても人生のすべてをかけてやるものである」というものに対し、Dは「自分の夢さえかなえばそれ以外はどうなつてもよいという姿勢はおかしい」と意見を述べた。

討論ではBは「芸術的価値は生きる上での最上位の概念である」と主張。また、Eは「夢をかなえるために人は生きている」という論を述べるのに対し、Dは「人を犠牲にしてまでかなえようとする芸術的価値や夢とは何か、それは結局何がままに過ぎない」と主張した。いくつかの具体例や状況が提示され議論は白熱したが、結局この問題については「芸術的価値と人とともに生活するという考えは場合によっては背反するもので、そこに人生の選択や葛藤が起こるのではないか」という意見が出、さらに、この問題はその後の李徴が虎になることをも含めて考えてみようということが提案され討論はうちきつたが、最初から是か否かは揺れる問題になり、学習者はかなり自分の意見が揺らいだようであった。

4 虎になることで、外見も内面も一致し、虎として悩む事なく生きて行けるのでよい。

Aは賛成、B、D、Eは反対、Cは保留。賛成の意見は「虎になることで考えずに済むということは楽になれるということだ。私が李徴だったら楽になりたいと思う」というもので、反対の意見は「虎になる過程は良いが、虎になったまま人間に戻れないのでは幸せではない」「李徴は虎として生きて行けるかは疑問である」などがあげられた。

討論では、まず「外見と内面の一致」ということが話題となり、Dが「虎になってしまえば内面というのではないのではないか。悩んだり幸せかどうかという問題は人間だからこそ起こりうる問題だ」と述べ、またCは先の3の討論を受けて「虎になることで人間としての自覚で出てきたからこそ李徴が虎になってしまふのは悲劇だと思う」と意見を出した。一方Aは「D、Cのいうこともわかるが、だからこそ自分なら虎になることを選ぶ。李徴の悲劇を自分のものとして考えると、だれにも理解されないまま虎の外見で人間の心を持ち続けるのは切なすぎるし、生きることには耐えられないだろう。」と意見を述べた。生徒はこの辺りの討論で、同じことを同じように読み取っていないが、出てくる意見がなぜ違うのか考え始めていたようである。

5 周亜とうまくやろうとしてもできない性情から虎にならぬ李徴に共感できる。

A、Bは賛成、C、D、Eは反対。賛成の意見は「人間の弱い部分を見せる李徴の在り方と私の今の在り方には通じるものがある」というもので、反対の意見は「李徴は本当にうまくやろうとしたのだろうか。できないといっているのは言い訳ではないか」という李徴の告白に対する懐疑的な意見が出された。

討論では賛成のAは「山月記を最初に読んだ時にはどきどきした。私の中には李徴的部分がたくさんあると思うし、それは本当は哀参や他の人にもあるんじゃないか」と述べたのに対し、Eは「自分から見れば李徴はわがままな人にしか見えない。読みながら腹が立った」と述べ、また、Dは李徴がいつていることは全部正しいとは思えない。自分が虎になったことを正当化するために自分にとって都合のいい過去や記憶だけを述べているのではないかと疑問を述べた。その後意見は李徴の告白を事実として読むかどうかという点に論点に移り、最終的には「李徴の告白は李徴にとつては真実だろうが、事実とはいえないのではないか」という意見に集約された。また、ここにきてAが「私は李徴の応援団だ」と述べたように、李徴に共感的理解を示すAと、李徴に対し批判的なDとを中心に、それぞれの立場が明確になってきた。

7 自らの行動によつて虎になったのは自業自得である。

C、D、Eは賛成、Aは反対、Bは保留。賛成の意見としては「虎になってしまったのは李徴が他との交わりを絶つた結果であり、自分の行動の結果なので仕方がない」というもので、反対意

見は「李徴は別に意図的に悪いことをしたわけでもないし、そのせいで虎にさせられたのではない」というものであった。

討論ではEの「普通の人から見ればやはり李徴の行動はよくないと思う」という意見を受けてAが「すべての人間は普通と言えば普通だし、異常と言えば異常とも言える。李徴だけが特別なわけでもなく、李徴的な部分はあるはず。それを因果応報、自業自得で単純に悪としてしまうのはどうか」と疑問を提示した。一方Cは「確かにAの言う通りかもしれないが、どこかで線を引くことも大切ではないか。やはり道徳や常識、伝統的な部分からの判断というものもあるのではないか」と述べ、論点は普通と異常、常識や道徳と個性ということになった。このあと、AとDの間で個性に対する考えのやり取りがあり、何をもつて個性ととらえるかについてもこの見方に大きな隔たりがあることにお互い驚いた様子であった。

8 もつと自分が傷つくことを恐れずに、他人との関わりの中で切磋琢磨すべきだ。

C、D、Eは賛成、Aは反対、Bは保留。賛成の意見としては「人は人と関わる中でしか生きていけない。人と関わらないと理解されない。人に認められようと思うなら努力すべきだ」というものであり、反対の意見は「切磋琢磨すべきであると言うのはもつとだが、そうしようとしてもできないものもあるのでは。人の和の中に入りたくても入れないものや、入っているように見えて

も表面だけのものもあるはず。李徴は自分に正直であったのでは」というものであった。

討論では、先の意見を受けて「人と関わる」ということが問題となり、李徴の人との関わり方が改めて問題となった。特に「李徴は袁参与親友であったのか」また、「李徴と妻子の関係はどのようなであったか」と言うことが話題となり、Aは「現在の私達にも表面的な付き合いと内面的な付き合いがあるのではないかな。李徴の場合もたまたま周囲に内面的につき合えるものがないか。ただけかもしれないし、そう考えたと李徴が虎になったのが悪いことだとすればそれは袁参与にも責任があるはずだ」と述べた。一方Cは、「人というものは時には踏み込んでいかなければならない時があるはずだし、人が生きる意味とは人の中に踏み込んでこそ得られるものではないか」と述べ、生きることの価値を社会の中に見出すべきだと主張した。その後論点は「李徴が人と交われなかったのはなぜか」という問いを中心に「自己と社会」の関係にうつり、「自己が社会の中に組み込まれている時は問題はないが、社会と自己が相容れない時はどうか、またそれは悪なのか」という点について意見がだされ、犯罪者やいじめの問題まで含めて意見が交わされた。

(3) 戦略的な読みを潜らせる Ⅱ他者の読みを取り入れる

これまでの自分の読みになかった観点Ⅱ他者の読みを取り入れることで、自らの読みを変化、拡充、内省させる。

問二 上の設問で李徴の生き方について自分とは反対の考え  
方と考えられるものがあれば挙げてください。

		内 容	
		反対の考え	
A	7 8	• 虎になつたのは自業自得 • 李徴は切磋琢磨すべき	
B	6 9	• 虎になつたのはかわいそう • 李徴は家族のために生きるべき	
C	5 9	• 李徴は共感できる • 李徴は家族のために生きるべき	
D	1 4 5	• 芸術至上主義 • 虎として生きるのはいい • 李徴に共感できる	
E	4 5	• 虎として生きるのはいい • 李徴に共感できる	

問三 これまで読んできた自分の感想や問一での考えを括弧  
に入れて、問二の設問の答え(自分の考えと反対のもの)  
について、それを自分の考えとしてもう一度この山月  
記を読んだとき、この話ほどのような話として読めま  
すか。また、読み直しをやってみての感想はどうですか。

読み直した内容		読み直しに対する感想	
A	• 李徴は詩人として生きるなら 憶病な自尊心や尊大な羞恥心 を捨てて、人と交わりながら 切磋琢磨すべきであった。ま た李徴は社会に順応すること	• そのような観点から話を読む ことはできないことはなかつ たが、李徴を突き放してみる ようで納得が行かない。この 話はそんなに単純ではないか	

のできなかった人間だから、  
反面教師として自分はそうな  
らないように自分の中の猛獣  
とつき合っていくべきだ。

ら。人間そのものについて考  
えさせられる話だろうし人間  
をそんなに簡単には割り切れ  
ないと思う。

• 運命とはいえ虎になつてしま  
うのはかわいそうだ。また虎  
になるくらいなら家族のこと  
を考へて普通に働いていれば  
李徴は虎にはならなかつたか  
もしれない。また家族から見  
たら李徴は虎になるような人  
ではなかつたと思う。

• かわいそうという読み方は自  
分の中ではしっくりとこなか  
つたが、家族のことを考へて  
読んでみることは自分の中で  
少し読み方に変化があつたと  
思う。家族のために生きると  
はいわれないがそれも一つの人  
生の選択だ。

• 虎になつてしまったのは自ら  
が望んだことではないが、そ  
れも運命だとしたら仕方がな  
い。だがせつかく人と接する  
上で自らの欠点に気づいた今、  
虎になつてしまふのは切ない。  
虎になるならもう一度人間に戻  
つて詩を作りたい。

• 自分は最初から李徴について  
もつと人の中に入っていけば  
いいのにと思つて読んでいた  
が、自分が李徴になつて考え  
てみると、もしかしたらそう  
できなかったのかもしれない  
とも思える。

• 人は自らの夢や目標のために  
生きることができるとし、その  
ためには社会の枠から離れて  
いくこともある。その時には  
道徳や理性との葛藤もあるだ  
ろうが、それに気づき、また  
乗り越えようとした李徴は虎  
になつたとしても進化したと  
言えるのではないか。

• 最初になかなか李徴を共感的  
に読むという事は難しかつ  
たが、自分の中であらためて  
李徴的なところがなにかを考  
えてみたとき、場面場面によ  
つては自分の理性が欲望?に  
負けることもあるし、他人事  
ではないということもわかっ  
た。

• 確かに虎として生きていくの  
は人間の価値から見れば辛い  
。

• 読み直しの設定が虎として生  
きていくことと李徴への共感



ことだが、虎になってしまえばそれもそんなに悪くない。

ということだったので、虎として生きていくことを読み直して優先すると人間李徴の考えと矛盾が起こり、共感的に読めたかどうかはわからない

(分析) 自分にないものを設定し読み直しをするということは難しかったようだ。それは当然のことながら先の自己の読みを全く白紙に戻すわけにはいかないからである。しかし、その中でもCやDは共感的読みをすることで、李徴の思いや行動を肯定的な視点から考え、それを受け入れようとする姿勢が見られる。一方Aは読み直しをすることで自己の読みが変化することを認識し、さらに自らの読みに対する認識も深まっている。

(4) 自らの読みを内省し、枠組みの変化、拡充を促す

問四・問三で考えた解答と先の問一における解答のそれぞれについて、自分自身の考えや意見を振り返り、比較してみた時、あなたの意見はどのような特徴が感じられ、またそれは自分のどのような考えや経験からでてきた考えだと思えますか。

・自分以外の人の考えについて振り返ったとき、自分の考えとは違った考えを持つ人について、その意見にはどのような特徴が感じられ、またそれはその人のどのような考えや経験からでてきた考えだと思いますか。

D	C	B	A	自己の意見の感想・特徴	他人の意見の感想・特徴
<p>・自分の読み方には自信があったのだが、人と比較してみると以外と偏っているのかもしれない。自分は八方美人な性格なのでとりあえずこう考えて</p>	<p>・自分の読み方には自信があったのだが、人と比較してみると以外と偏っているのかもしれない。自分は八方美人な性格なのでとりあえずこう考えて</p>	<p>・自分は討論をしながら李徴を共感的に見ていることに気づいたが、同時に他の人はそういう読み方をあまりしないということにも驚いた。ふだん部活でよく思うことだが自分以外の人についてもその立場を考えることは大事だと思う。</p>	<p>・自分は討論をしながら李徴を共感的に見ていることに気づいたが、同時に他の人はそういう読み方をあまりしないということにも驚いた。ふだん部活でよく思うことだが自分以外の人についてもその立場を考えることは大事だと思う。</p>	<p>・私の根本にあるのは人間を考へ、苦悩する生き物と考えるものだ。人間である以上、満足することはありえないし、他人と全く同じであることもない。また、他の人と比べながら自分は以外と反体制的なかなあとも思った。</p>	<p>・討論をしているときに思ったのは、D君は人間というものを道徳的にとらえているなということだった。また、個人というよりも全体の幸せや社会秩序の安定を考えているようにも思える。彼のふだんからして少し意外だった。</p>
<p>・やはりAさんの考え方と全てが違ふものだったのはショックだった。ふだんは良く意見が合うのに不思議でもある。ただどうやら自分とは発想が</p>	<p>・やはりAさんの考え方と全てが違ふものだったのはショックだった。ふだんは良く意見が合うのに不思議でもある。ただどうやら自分とは発想が</p>	<p>・他の人の意見は根拠や具体例がはっきりしているために、私の意見よりも説得力があった。最初は自分とは逆の意見かと思っているものなのがこの間にか自分の意見がなっているときもあって混乱した。</p>	<p>・他の人の意見は根拠や具体例がはっきりしているために、私の意見よりも説得力があった。最初は自分とは逆の意見かと思っているものなのがこの間にか自分の意見がなっているときもあって混乱した。</p>		

<p>こう答えればみんな丸く収まるという答えを、自分なりに考えているのかもしれない。</p>	<p>E</p> <p>・今までこういうことを考えてみたことがなかったのとまじった。特に自分の意見について振り返ってみても問題のそれぞれについて行き当たりばったりで方向性がないところを先生につっこまれたりしてひやっとした。これが私の国語の弱点なのだろう。</p>
<p>根本から違うことはわかったし、どちらが正しいともいえないと思う。</p>	<p>・討論をする中でみんなの意見が深まるのがわかって楽しかった。特に何か核心に近づいたと思つたときは少し興奮した。私はどちらかというところCさんやD君と考え方は近かつた。</p>

(分析)改めて自己の読みと他者の読みを振り返ってみることで、自らの言葉やもの見方がどこから来ているか自己の枠組みについての問い直しが起こっている。また自己と他人が違ふということや、さらにそれを認めていくべきだという視点もうかがえ、山月記の読みを交流するという行為を通して、それを自己の問題にまで引き結び、認識の枠組みに対する意識化、変化が見られる。

(5) まとめ(感想を記述Ⅱ家庭学習)

本実践のまとめとして学習者に授業全体の感想を書いてもらった。ここでは先の討論を受けてAさんとD君の感想を報告し、本稿のまとめとしたい。

この授業を受けての感想を自由に記してください。

Aさん

はじめにこの山月記を読んだときや、授業を受けたときには実は私も李徴に対して反感を持っていたような気がする。ただこのプリントや討論をしていく中で私自身の中で一つの発見があつて、あつこれだと思ふところがあつたので討論ではかなり強引な意見も言つたと思う。そこで山月記とは少し離れるが私の考えを少し述べてみたい。

私は1年ほど前、自分の進路について考え始めたときに漠然と「社会とは何か」と言うことを考え始めた。そして、ふだんの新聞やニュースなどの報道について考えるうちに特に「法律とは何か」ということを思うようになり、さらに法の本になつたのは道徳的なものではないかと考えた。では道徳的なものはどこから出てきたのだろうかこの1年間考えていたのだが、結局その結論はまだ出ていない。私は1年前までは道徳をすごく重んじていて、それは絶対に正しいものだと思つていたが、最近はそのでなくなつた。確かに道徳は集団の中で生きるためには必要なものだが、それが正しいとも今は言えない。先日友達と話をしている、外国の人がたくさん死んだという話をしていたときに、その人はその事件が別に自分に直接関係がなければ悲しくも何ともないし、自分分は自分、人は人、人間なんてそんなものだといつた。私はそれに対しそれは違ふと思つたのだが、一方でそうなのかもしれないと認めている自分にも気づいた。そんなわけで私の中の道徳観が今は必ずしも正しいと言えなくなつてきているので、山月記に対しても素直に考えることができなくなつてきているのかとも思う。し

かし、討論をする中でD君やEさんが道徳的な事を正しいといったことは、それも違うなあと思いがちでも少しうれしくもあった。まだこの授業を受けたことで混乱しててまともがらないのだが、私は人間というものについて、人間そのものの存在と集団の中に生きる人間とを分けてとらえようとしている気がする。ただこのような考えだけでもとらわれないようにしたい。今回の授業を受けてわかったように、人間は割り切れない動物だと思うので。

D君

この授業、特に討論とその後の自分の考えを反省してみるというところで、今まで自分がどのように考えていたかを客観的に認識できたと同時に、自分の考え方の浅いところや、さらには自分の性格までもが表面にでてきたようで驚いた。特に後でみんなに指摘された自分は正義感が強いということは自分にとってはいいことだと思う反面、少し不安も残ったのでここで考えてみたい。自分は現在教師になろうとしている。そこでこの正義感というものには教育者にとっては必要だと思うのだが、一方、その自分の正義感にあわない生徒を見捨ててしまう危険があるのではないかとも思う。このことは李徴の考えに対し最初から批判的であった自分に対し、Aさんから特に言われたことでもある。いわれて思い当たったのだが、先日ボランティアで養護施設に障害者の介護にいったときに、自分が担当していた子供があまりにもいうことを聞かずに、私にしつこくまとわりついて邪魔をしたので、私は内面的に切れてしまい、非常識だと内心で差別的な罵倒をしてし

まった。今考えるとこれも同じことで、結局は自分の価値観の枠に入らないものを私は道徳や常識で切り捨てていたのかもしれない。この授業を受けて李徴の考えを李徴の立場から考えることで彼の考えが必ずしも間違っているのではないとわかったように、これからは自分が持っている枠の中に入らない考えも、一度立ち止まって考えることができるようにする事が当面の私の課題であると思う。

(宮崎県立宮崎西高等学校)